

(阿蘇・九重)―別府―(日南海岸)―宮崎―(えびの霧島)―鹿児島(桜島・指宿)のいわゆるS字型国際観光ルートが策定され、今後整備されることになったが、今日の九州観光の基幹ルートは、このS字型ルートをさらに周遊化し、北九州―別府を耶馬・日田で結び、天草五橋の開通により天草と人吉・北を経て鹿児島で結ぶ8字型周遊観光ルートが代表的な定型化された観光ルートとなつてきている。今後九州の観光は、この8字型国際観光ルートを基盤として九州広域観光圏の総合的な形成が推定されるものと考えられる。

九州横断国際観光ルート

九州8字型周遊観光ルートの主軸を形成するのが、別府―阿蘇―熊本―天草―雲仙、長崎を結ぶ九州横断国際観光ルートである。昨年における本県への観光客のルート別をみると県内への入込客は、島原、雲仙方面から三八・七％、別府大分から三六・七％、そして県外への流出は別府大分方面への四八・一％、島原雲仙への一九・三％と九州観光において横断ルートによる観光客が主流を占めているが、瀬戸内海、阿蘇、雲仙、天草の三つの国立公園と別府、熊本、長崎の三つの国際観光都市を結びまことに多彩な観光ルートとして将来益々九州観光の主軸ルートとしての地位を確立するといえる。

九州観光の主軸ルートへ...

火口への一方交通的な観光形態であり、これはまた山上一帯への施設集中の結果ともなっていた。横断道路の開通を契機として阿蘇景観の多面性が見られる3つの火口への観光ルートが完成したが、年々増加する観光客を受入れるためさらに阿蘇の広い地域において観光活動が展開できる誘道、施設、景観変化、分散、滞留を基調とした阿蘇スカイラインをはじめ、阿蘇全域にわたる周遊ルートを整備すべきである。

観光地づくりの推進

阿蘇は、山岳、火山、高原、溪谷、森

よう。したがって、立地的に主軸ルートの中心を占める阿蘇は、九州広域観光圏の中核都市を目指す熊本市、山の阿蘇に対応する海の天草、そして別府、雲仙とそれぞれの多彩な観光資源を分担しつつ、特性ある観光地づくりが特に必要である。

開発の基本方向

阿蘇観光にとって観光客の滞留性をいかに確立するかが大きな課題であるといえる。そのためには

△周遊ルート整備
▽永い間阿蘇の観光は、中岳火口見物と

林、温泉というように資源が多様である。したがって観光開発にあたっては、周遊ルートの整備とともに、各観光地の立地条件と観光客層を正しく把握し、機能的にも地区的にも総合調整された形で観光事業を行ない、各観光地相互の連携い発展を推進すべきである。

望まれる自然の保護

阿蘇の大自然の景観は、阿蘇観光の母体である。本来観光開発と自然保護は対立するものでなく開発は保存に連なるものであり、要は両者の調和にある。したがって国立公園により定める公園計画に

よって保存すべき区域は、完全に保護規制し、自然をより効果的に活用すべき区域は、観光客の利用のため適切な施設を整備すべきである。

阿蘇周遊観光ルートの新設整備

周遊観光ルートの基盤となる阿蘇スカイラインをはじめ道路整備、国鉄豊肥線の周遊ジゼル列車の増発、車内の改良および高森―目影線の完成等の促進が必要である。

阿蘇外輪環状ルート

○手野(横断道路)―大観峯―かぶと岩

―二重峠―赤水―長陽―高森―根子岳―坂梨―手野(横断道路)
△基盤道路―阿蘇スカイライン(平野―大観峯―かぶと岩―二重峠―赤水)高千穂大津線(立野―長陽―高森―泉境)小林阿蘇線(高森―坂梨―平野)河陰阿蘇線(赤水―長陽)

阿蘇広域観光ルート

○かぶと岩―菊池水源―菊池熊本―山鹿―玉名―長洲
○立野―長陽―高森―高千穂
○大観峯―杖立―日田―北九州
△基盤道路等―菊池スカイライン、高千穂大津線―国鉄高森―日影線 国道二一―二号線(中津―杖立阿蘇)

阿蘇五岳周遊ルート

○古坊中―杵島岳―米塚―湯の谷―地獄垂玉―古坊中
△基盤道路―坊中山上線、赤水上線、湯谷地獄垂玉線、地獄垂玉古坊中線

火口観光ルート

○宮地―火口コース、坊中―火口コース
赤水火口コース、長陽―火口コース、南郷―火口コース
△基盤道路―一の宮、仙酔峽、古坊中線坊中山上線、赤水上線、阿蘇下田山上線、高森白水上線

ハイキングコース

○登山コース 坊中―火口コース、内牧

―火口コース、地獄垂玉―火口コース、高森―火口コース、白水―火口コース
○阿蘇五岳探勝コース、古坊中―中岳―高岳―根子岳コース、一の宮―仙酔峽―高岳コース、一の宮―日の尾峠―高森コース、杵島往生探勝コース、夜峯探勝コース
○外輪山探勝コース 北外輪一周コース(大観峯―斧岳―尾の岳―菊池溪谷)俵山登山コース、地獄峠探勝コース、高森峠登山コース、鞍岳探勝コース、菊池溪谷探勝コース。

観光機能施設の整備

観光客受入れの基盤である観光施設は横断道路の開通を契機として総額五四億円に及ぶ観光投資が行なわれるなど、阿蘇の観光地づくりが本格化してきた状況にあるが、今後次の機能施設を中心とした整備が必要である。

宿泊施設等観光施設の整備

阿蘇の旅館ホテルの宿泊機能は、広域観光客を受入れる日本観光旅館連盟基準以上が一軒、四、五三八人の収容力であるが、他の主要温泉観光地に比べて規模、設備において充分とはいえない。特に既設旅館の日観連基準への昇格、団体職域旅行の増加に即応した。一〇〇人以上を収容する旅館整備等資金対策の強化をはかる必要がある。さらに国民大衆旅行のすう勢に即し、大衆かつ健全な宿泊

阿蘇における宿泊施設数 昭和41.10月調

種別	阿蘇地区			一の宮地区			黒川地区			杖立地区			南阿蘇地区			計		
	軒数	室数	収容力	軒数	室数	収容力	軒数	室数	収容力	軒数	室数	収容力	軒数	室数	収容力	軒数	室数	収容力
旅館	20	521	1,900	1	15	807	4	57	200	23	306	1,475	6	246	888	51	1,130	4,538
ホテル	45	987	3,075	13	108	409	13	237	760	23	379	1,785	8	339	1,003	108	2,020	7,029
民営宿舎	10	112	355	1	28	123				1	7	50	1	16	50	122	2,202	455
計	55	112	355	14	136	532	13	237	760	30	386	1,832	11	404	1,206	123	2,232	7,760

(注) 1. 昭和41.10月県観光課調。 2. 日観連旅館数は旅館業法による旅館に含まれている。

手をつなぐ若き後継者たち

―軌道にのる蘇陽町農業専修学園―
農業後継者の育成―これは当面する農業問題の中でも、最も急務とされている。県下でも農村の人口づくりについてはいろいろな対策が講じられているが、中でも一番活発なのが農村青年の研修だ。中でも県の指定学園として今年四月に発足した蘇陽町農業専修学園は、殆んど山間地帯という不利な地形条件を見事に克服して、一六〇名を超えるという盛況ぶり、事務局をあわせている。ところで蘇陽町の場合、他の町村に比べて、青少年の数が多く、今年で今年で二割も残り残存して町の農業と取組んでいる。町ではこれらの若き後継者たちに明るい希望と信念を持ってもらおうということだ。

青少年、学生を対象とした利用施設の整備

阿蘇の大自然のなかに青少年、学生を対象とした利用施設を整備することは、阿蘇観光の基本方向ともいえる。現在、「国立阿蘇青年の家」をはじめユースホステル(三軒収容力二六〇人)等建設されているが、一定の地域に立地条件を生かした研修施設、レクリエーション施設、スポーツ施設、修学旅行や青少年のための宿泊施設等の集約的な整備が必要である。

その他の利用施設

阿蘇の観光は、単に広域観光客を対象としてだけでなく、今後、あらゆるところで勤労にいそむる人々に対して大自然の生活を満喫してもらおうため、自然と人

この農業専修館が発足したわけだ。この学園では、一応、二四才以下を対象として、高等科と普通科に分かれている。普通科生は目下三七名で県の指定学園として指導をうけ、又年三回(一回七日間)の集合研修では城南町にある県経営研修農場の青年研修を受け、高等科は町の研修で年間一六日間(一月一日を集合研修日として二日三日の研修を受けている)。男女共学の魅力も手伝ってか、出席率も一〇〇%。予想以上の明るい雰囲気とフアイトがみちみち、好調を続けている。
なお学園の高等科の主な学習項目を参考までに掲げてみると、農業一般では稲作、雑草、果樹、畜産農機具、一般農業として地方自治、農協の知識、町の統計、ほかにレクリエーション、映画、クラブ活動といったようなものである。

よこがお

インホメーションセンター等の建設

阿蘇における広域観光客の年間平均化をはかるため、利用施設の整備とあわせて宣伝広域化をはかる必要があるが、そのため観光地および周遊ルートを一本化した体制のもとに、阿蘇観光の総合案内所や阿蘇の自然火山歴史を紹介したビジター等を建設する必要がある。

展望駐車場施設の整備